The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人の尊厳に係る支援課題に関する研究：ストーマ保有者への支援～排泄管理の自立に関する保有者実態調査・排ガス音の対応策～
Author(s)	安藤, 嘉子
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73536
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（安藤嘉子　）	
論文題名	人の尊厳に係る支援課題に関する研究：ストーマ保有者への支援 ～排泄管理の自立に関する保有者実態調査・排ガス音の対応策～

論文内容の要旨

排泄は人の尊厳に係る行為であり、排泄に関連する課題の検討は、今後の高齢者医療・社会生活支援の基盤として重要である。ストーマは不随意に排泄物が体外のストーマ袋に出ることを管理する必要があり、ストーマケアの課題を検討することは多くの課題解決の端緒となるものである。本研究は、ストーマ管理の自立に注目して全国実態調査を行い【研究１】、一方で尊厳ある社会生活の支援という観点から排ガス（放屁）音の特性を検討【研究２】したものである。

【研究１】ストーマ保有者に対する実態調査：2017年4月から2018年3月にストーマ保有者3000人対象に実態調査を行った。内容は、ストーマ装具交換、装具注文、排泄物処理における保有者の自立や局所管理、日常生活、社会生活上の困った経験の自記式質問紙による横断的研究である。回答者は1,086人（回収率36.2%）で、80歳代以上では装具交換、注文、排泄物処理の自立割合はそれ以前の年代よりも有意に低下していたが、排泄物処理では80歳代以上でも80%が自分で行えていた。ストーマ保有年数別にみると、装具交換、注文では保有年数が半年未満だと自立割合が低く（70歳代35%、80歳代7%）保有年数が長くなるに伴い自立割合は増加していた。排泄物処理については80歳代以上でも保有年数が半年未満でも71%が自立していた。以上から、高齢ストーマ保有者には入院中は排泄物処理の自立を目標とし、装具交換や装具注文には長期的支援が必要であることが示唆された。

【研究２】排ガス音の聞こえ方とその対策に関する研究：人工肛門保有者の排ガス音は不随意な発生で自制できず対人関係や社会生活に影響を及ぼすとされている。本研究では人工肛門の排ガス音の発生頻度やタイミングと食事・睡眠の関係（発生パタン）、排ガス音の音響学的特性（周波数、音圧等）について調査、分析を行った。対象は、同意の得られた人工肛門保有者19名で、24時間排ガス音の録音と睡眠・食事等の生活状況や便性状の日誌記録を依頼した。録音データを皮膚・排泄ケア認定看護師が聴取し排ガス音の発生時刻・回数を記録し対象者の日誌記録と照合して睡眠や食事時間との関係性を検討した。さらに合計297音からなる排ガス音データベースを作成し音響学的特性を検討した。その結果、1日の可聴排ガス発生回数は平均16.6回、発生間隔は食後2時間前後に集中、その後は数時間無音状態がある、睡眠中の排ガス音発生がほとんどないなどが見出された。また、排ガス音の周波数は1000-6000Hz帯域に分布し0.2kHz周辺にピークがある、排ガス音は図書館など静寂な場所での騒音に相当する40dBを超える音圧が多い（大腸:85%、小腸:83%）などが明らかとなり、排ガス音対策の必要性を明示することができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　安藤　嘉子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	大野　ゆう子
	副 査	教授	井上　智子
	副 査	教授	神 出　計

論文審査の結果の要旨

排泄は人の尊厳に係る行為であり、排泄に関連する課題の検討は、今後の高齢者医療・社会生活支援の基盤として重要である。ストーマは不随意に排泄物が体外のストーマ袋に出ることを管理する必要があり、ストーマケアの課題を検討することは多くの課題解決の端緒となるものである。本研究は、ストーマ管理の自立に注目して全国実態調査を行い【研究１】、一方で尊厳ある社会生活の支援という観点から排ガス（放屁）音の特性を検討【研究２】したものである。

【研究１】ストーマ保有者に対する実態調査：2017年4月から2018年3月にストーマ保有者3000人対象に実態調査を行った。内容は、ストーマ装具交換、装具注文、排泄物処理における保有者の自立や局所管理、日常生活、社会生活上の困った経験の自記式質問紙による横断的研究である。回答者は1,086人（回収率36.2%）で、80歳代以上では装具交換、注文、排泄物処理の自立割合はそれ以前の年代よりも有意に低下していたが、排泄物処理では80歳代以上でも80%が自分で行えていた。ストーマ保有年数別にみると、装具交換、注文では保有年数が半年未満だと自立割合が低く（70歳代35%、80歳代7%）保有年数が長くなるに伴い自立割合は増加していた。排泄物処理については80歳代以上でも保有年数が半年未満でも71%が自立していた。以上から、高齢ストーマ保有者には入院中は排泄物処理の自立を目標とし、装具交換や装具注文には長期的支援が必要であることが示唆された。

【研究２】排ガス音の聞こえ方とその対策に関する研究：人工肛門保有者の排ガス音は不随意な発生で自制できず対人関係や社会生活に影響を及ぼすとされている。本研究では人工肛門の排ガス音の発生頻度やタイミングと食事・睡眠の関係（発生パタン）、排ガス音の音響学的特性（周波数、音圧等）について調査、分析を行った。対象は、同意の得られた人工肛門保有者19名で、24時間排ガス音の録音と睡眠・食事等の生活状況や便性状の日誌記録を依頼した。録音データを皮膚・排泄ケア認定看護師が聴取し排ガス音の発生時刻・回数を記録し対象者の日誌記録と照合して睡眠や食事時間との関係性を検討した。さらに合計297音からなる排ガス音データベースを作成し音響学的特性を検討した。その結果、1日の可聴排ガス発生回数は平均16.6回、発生間隔は食後2時間前後に集中、その後は数時間無音状態がある、睡眠中の排ガス音発生がほとんどないなどが見出された。また、排ガス音の周波数は1000-6000Hz帯域に分布し0.2kHz周辺にピークがある、排ガス音は図書館など静寂な場所での騒音に相当する40dBを超える音圧が多い（大腸:85%、小腸:83%）などが明らかとなり、排ガス音対策の必要性を明示することができた。

本研究はストーマ造設者を対象とした排泄自立の実態調査として、排ガス音を連続直接計測し音響学的に分析した研究として初めての報告であり学術的および社会的意義は大きい。

以上より、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと評価する。